# 船生石（鬼怒石）の研究

中川　博夫（元宇都宮市立富屋公民館）

## 1．緒　論

栃木県塩谷町は、水、空気の緑なす山々が連なり、人気スポット「尚仁沢湧水」で代表される風光明媚な地域である。鬼怒川の流れには、「カゴ岩」、河川敷の『亀穴群』の奇岩と、その岸壁の佐貫観音などの景勝地が連なり、戦前には国策を支えた中小の20個所以上の鉱山が、黄銅鉱・黄鉄鉱等を産出して、鉄路で運んだ。その豊かな風土の岩石と鉱物が産業の隆盛をみたのである。

かつての日光鉱山㈱の会社概要によれば、「栃木鉱山の周辺の地質は、第三紀中統の時代に堆積されたと推定される緑色凝灰岩が貫き、その周辺で流状構造を示す流紋岩となる」とある。「船生石」とは、まさしくこの緑色凝灰岩のことであり、時代は定かでないが、昔から、地元の採石者により家内工業的に営まれ、特に川村地区等では多くの住民が携っていたことが伺える。昭和50年代に入り、宇都宮の大谷から、㈲小森石材店を筆頭に数社が進出した模様であるが、ほどなく撤退する。令和元年大谷で閉店の㈲大幸石材店は、当地沼倉の採石場においては、平成10年で船生石採石の業務を終了させた。これは、大谷採石業者の一連の対外進出の終りであり、船生石の歴史の終焉をも意味する。

船生石は、採石者により傍を流れる清流の鬼怒川に因み、「鬼怒石」というブランドがつけられ、見た目に、キメ細やかで白い光沢で美しい。この、特徴を利用して、室内装飾品や石造彫刻にも利用されたが、やはり用途の多くは、蔵・塀等の建材に用いられ、現在でも、地元はもとより宇都宮界隈でも散見できる。

ここに、それらを総括して記録にまとめ、可能な限り検証しておきたい。関係者もなくなり、大きな地域文化にもかかわらず、ここでも伝承性もままならない現状である。

なお、調査に当っては、塩谷町総務課・教育委員会生涯学習課及び地元諸氏のご協力をいただており、本稿が併せて同町の発展や町づくりに貢献できればと願っている。

## 2．周辺の岩質などの自然環境を概括する

### ㈠　鬼怒川河川敷

鬼怒川河川敷は、鬼怒川を県道63号で塩野室から渡った、直後の佐貫の観音前付近にある「亀穴」といわれる奇岩の川底が露出して、佐貫の観音とともに、遠足にもよく利用される。下流には、絶滅危惧種　オキナグサ（翁草）の群生地がある。

写真１．鬼怒川河川敷

### ㈡　佐貫観音院（東海寺別院）

栃木県塩谷町佐貫にある真言宗智山派の寺院。江戸時代までは、岩戸山慈眼寺観音院であったが、明治期の廃仏毀釈により、廃寺となり、現在、宇都宮市篠井町の東海寺の別院となる。本尊は、鬼怒川河畔の聖観世音菩薩（しょうかんぜおんぼさつ）である。

### ㈢　佐貫石仏（佐貫の観音・国指定文化財）

この鬼怒川左岸にそびえる大岩壁は、 石英粗面岩で中腹に線刻されている。石仏が智拳印を結ぶ金剛界の大日如来座像がある。世にいう、『佐貫の観音』の由来には、〈弘法大師の一夜の作〉と伝えられるのが逸話である。創建は諸説ある。金剛界印を結ぶ、大日如来座像がある。風化が進み、全体像が拝むことは、困難となっている。大きさは、18.2メートル顔の大きさは、長さ約３メートル、幅約1.6メートルである。この岸壁には、ハヤブサが飛来し、小ひなを育てる。

写真２．佐貫石仏
俗に、「佐貫の観音様」といわれることがある

## ３．船生石の地質的環境について

### ㈠　酒井豊三郎氏の見解

宇都宮大学名誉教授（当会員）は、船生石と佐貫石仏の石について、本会に次の見解を寄せている。

船生石と佐貫石仏が彫られている凝灰岩とは全く別物である。船生石は１～３㎝の軽石を主体とした火山礫凝灰岩で、石の硬さとしては狭義の“大谷石”とほぼ同じである。一方、佐貫の凝灰岩は砂の粒径の粒子を主体とする凝灰岩で、緻密で硬質な岩石。私的には、凝灰質砂岩と呼ぶ方が適切な岩石であると考える。両者が堆積した時期については、厳密なデータは得られていないが、前者は中期中新世の初期、後者は前期中新世の中期～後期で、２百万年から３百万年の年代差があると考える。

### ㈡　「塩谷町史」　Ｐ78Ｌ６には次の記載がある

館の川凝灰岩は、東荒川上流の鳥羽新田にある鳥羽の湯の下流れる左岸に、その露頭を見ることができる。この凝灰岩の基盤は広く矢板市・喜連川町にまで伸びている。館の川凝灰岩は、矢板市館の川が最も典型的に露出しているので、本県陸成層の層序的な標準層になっている。その地名をとり本層の名称としている。従って川崎域は舘の川凝灰岩層の上に築城されていることになる。

### ㈢　「塩谷町史」　Ｐ78Ｌ３「船生石と館の川凝灰岩」について

「船生石は、かつて建築用石材として船生地区沼倉から採掘され、大谷石よりキメ細かくていわゆるミソと呼ばれる部分が少なく、見た目には美しい。しかし、最近では、コンクリートブロックなどにおされて採掘は振るわない。」の記載は、平成７年の発行で、これ以前、特に多くの土木や建材として利用されていたことが窺える。

## ４．筆者の船生石の採石場についての次の記録から考察を進める

### ㈠　船生石について、筆者の平成７年12月６日の、徳次郎石工、田崎芳男への取材記録

『船生石の採石場の山は、３か所ある。このうち、２か所は閉鎖されていて、現在、一か所のみで採石されている。ここの岩質が一番いい』、と述べている。

（この場所は、十一面観音の船生石を掘りだした沼倉であることは確実である）

田崎のいう船生石の３つの山とは、何処であろうか。取材を試み、次の３か所が確定的になった。

### ㈡　船生石の採石場　（別添　船生石採石場　本稿の末の地図を参照）

- ●【沼 倉 採 石 地】　船生　沼倉　㈲大幸石材採石地　　斎藤　庄司　宅　裏　（平成10年（1998）閉鎖）
- ●【富沢山採石地】　観音寺の裏山にある　（観音寺より）　富沢山と判明　（昭和57年閉鎖）
- ●【西小屋採石地】　塩谷町船生西古屋（塩谷町総務課より）（昭和の末ごろ閉鎖といわれる）

## ５．観音寺の調査　令和３年６月８日（火曜日）

高野山真言宗補陀落山　観音寺は、塩谷町船生の中央に位置する。地域の石文化の研究には、石造物の多くある、地区のお寺の調査は欠かせない。

写真３．観音寺

観音寺　遠藤隆芳　住職　から、お話しを伺う。

- 寺自体は、高原山の７つの峰に、弘法大師が大日如来を刻んだ佐貫（讃岐）観音岩を合わせ、八葉連華となることに由来する。創建は、2035年で開創1200年を迎えることになる。幾度となく火難を乗り越え、羽谷久保（般若窪）西、木下（寺の木戸の下）の北方より、現在地に移転した。
- 境内にある、墓石は川石であり、他に多くの大谷石が使用されている。(船生石はないようだ。)
- 船生石の採石場は、お寺の裏山の『富沢山』と、『沼倉』の２か所を記憶している。
- 観音寺山門は、元は石屋根であったのが、トタンを経て現在の瓦になった。

＊「塩谷町創設史」によると、観音寺は明治42年ごろまで寺子屋を行う。明治７年船生村立小学校として発足した。境内に『立身館』創設の「学校発祥の地」の石碑がある。

## ６．　船生石各採石場跡の調査

以上により、判明した分の３カ所について現地調査を行う。

なお、船生石の採石場の呼称については、筆者が便宜的に付けたもので、正式の呼称がある場合は、事後、訂正をさせていただくことにする。

### ㈠ 【西小屋採石地】塩谷町船生西古屋（塩谷町総務課よりの情報）

写真４．西小屋採石場跡

2021年９月７日調査を行う。西小屋ダムを北にのぼる、地点にその採石跡を発見した。かなり広い、野球場一面位に見える。この石質は、土木用かと思われた。この道への途中で、住民の方２人に当時の状況を聞くが、「昭和の終わりごろ（1990年ごろ）まで採石が行われていた、地元でなく、今市の業者だったかもしれない」との話であるが、この記憶も曖昧だと付け加える。

### ㈡ 【富沢山採石地】(塩谷町船生　観音寺裏　林道富沢線山中)（観音寺のお話をもとに）

写真５. 船生石を知る人はもはや少ないと　斎藤豊美氏
＊本稿末の地図を参照のこと

令和３年10月24日富沢山に調査を試みる。途中、麓にお住いの、斎藤豊美宅より話を伺うことができた。

祖父の代に、自ら自宅の裏山で採石を行い、手掘りで、そりで下したと思われる（①）。その後、入口ゲートの西側の山中が採石場になり（②）、さらにその後東側に移る（③）。ここが船生石最大の採石場であり、宇都宮市駒生の㈲沼尾石材店 が事業を行う。(船生石採石終了後は、石材業は廃業したと聞く)。いつごろだったか、３名の遭難で１名の痛ましい死亡事故が起こった。(地方新聞に載った）　※Ｐ60地図を参照のこと

その事故により、再び②の箇所に採石場が移り、終了まで続いた。沼尾石材店は、最大時は、14 ～ 15名の従業員の規模であり、最後は、数名で採石をしていた模様だ。斎藤豊美の父政一も、その沼尾石材店に働いていた。昭和45年～昭和57年の勤務を証明する資料があり、ほぼこの期間が石材店の採石の時期でないかと考えられる。その後、船生石の採石の場は、沼倉に移ったと思う。

（注）金澤石材店（宇都宮市下荒針町）によれば、船生石の仕入れは、当初、沼尾石材店より行ない、次いで大幸石材店に変わった。併せて、同社は、大網石（桜石・赤石）の採石も行い、紅白の色コントラストの色調を目指していたという。(2022・１・17)

写真６．富沢山西側
採石場跡は絶景である。別地図②

写真７：富沢山全景　別地図③（本誌60頁参照）

### ㈢ 【沼倉採石地】　船生　沼倉　斎藤　庄司　宅　裏山

写真８．船生石　沼倉山採石地
かつて、徳次郎石工田崎芳男はこの材質は、彫刻材に一番いいと語った

もともと、斎藤家が何代か前から採石を行っていたが不明である。小森石材店に権利を譲渡する。大正時代の初期には、川村地区の若集たちが採石の史実がある。船生石の最後の代表的採石地である。

宇都宮市大谷　㈲小森石材店とともに大幸石材店等が採石の進出を行い機械掘りで行う。ほかにも大谷の採石業者があったとも聞くが、判明しない。小森石材店は、数年で撤退し、㈲大幸石材店のみで、ほぼ昭和50年（1975）～平成10年（1998）が採石期間だったという。

## 7．石山工業の調査（塩谷町船生沼倉）

写真９．屋号 「石山」の斎藤宅
沼倉船生石のルーツと考えられる

令和３年６月８日㈫　斎藤庄司宅を訪問調査　石山工業の斎藤庄司さんの奥様　斎藤和子さんより、お話を伺う。

・斎藤家は、屋号「石山」と称するから何代か前から農業の傍ら採石をしていた様だが、いつ頃からか分からない。それは、近隣で、石山工業を個人で営むまで続く。
・石山工業は、墓石・建築を扱っていて、令和元年ごろ、休止して２～３年になる。
・採石の権利を、小森石材店に昭和50年頃に移した。
・お爺さんは、町会議員で、人の面倒をよく見た人だった。
・㈲小森石材や㈲大幸石材店では、昭和50年ごろから、機械堀りで採石を行うようになった。(それまでの地場の採石は、手掘りだった模様)
・集落の人たちは、火災防止などから連鎖的にいい蔵を作ろうとした。
・石山工業の最盛期は、昭和58年ごろであった。その後、中国で、墓石の御影石を加工して輸入するようになって、振るわなくなった。

## 8．㈲大幸石材店の調査（宇都宮市大谷町）　大関美智子（昭和30年生まれ）　社長への取材

写真10．船生石貼りが映える
元の㈲大幸石材店の社屋
宇都宮市大谷町

・戦後、父、大関幸一は大谷で時計屋を営むが、先が見通せず、石材店に転業〈㈲大幸石材店〉と称した。
・宇都宮の国本の岩原から船生沼倉に昭和50年（1975）頃に進出、平成10年（1998）まで､｢鬼怒石｣のブランドで約23年間船生石の採石を行っていた。船生石の最後の、採石者である。令和元年（2019）まで、船生石などで石材店を営む。
・夫､巌は若い頃は､星雲の志で､麻布十番の小林石材店で修業し、大谷に戻る。
・沼倉進出の理由は、宇都宮の国本にいい採石場に出会えなかったからであるとともに、岩質のいい素材を求めて、小森石材店等と共に進出した。
・当初には、２名従業員を雇用していた。いい人たちだった。感謝している。その後は、夫　大関巌　と　美智子の「夫婦石工」のコンビが続く。機械あってできたことだと思う。
・切り出し工程は、採掘機を夫婦の呼吸で併せる。主にウインチで巻き上げ（美智子）・切り出し（巌）のコンビでホイストやフォークリフトでトラックに載せて、大谷の大幸石材店や岩原まで運ぶ。
・採石場の穴の中は、寒い。美智子は、体にさらしを二枚巻いて、臨んだ。これが、一番体に温かい。
・沼倉の作業場で、既製品の尺角サイズにカットして、大谷に運ぶ。又、岩原の加工所に依頼するものが多い。その後、問屋に行くもの、直接建築主から依頼に応えるものさまざまである。
・平成12年の宇都宮の「花博」に、沼倉産の船生石で「パナ　パナ　うさぎ」や「灯篭」を、徳次郎上町　田崎芳男氏に　製作してもらい販売した。　同じくマントロピース　等　製品も少し出荷した。
・船生石は、大谷石と同価格に設定した。夫婦石工でコストを抑えたからできたと思う。
・大幸石材店は、直接　建築や塀も請け負うこともあった。
・年間の生産額は食べるほどに十分だが、調子よく儲かる時もある、商売とは不思議なものだ。
・船生石の販売は､｢鬼怒石｣で臨んだ。必ずしも人気があったともいえない。理由は､むしろ石が｢綺麗過ぎた｣から受け入られなかった。この石材も、地域の農村部の建材に主に使用されたからだ。
・しかし、船生石は一部、都心の音楽ホールに「こぶだし」を施して使用された例がある。ワインのコースターにはマニアがいる。細工材として彫刻の素材にもなっている。
・船生石の在庫はまだあったが、大谷の㈲大幸石材店を、事情で令和元年に閉店することにした。
・大幸石材店の元社屋は、石張りの船生石の代表作として、見学者も来る。
・㈲大幸石材店は、船生石最後の採石業者であり、併せて、大谷の対外進出の終焉のようだ。令和元年の閉店は寂しいことだ、一つの時代の終わりかも知れない。

## 9．㈲小森石材店（大谷　後に廃業）の調査

・船生石は、㈲大幸石材等とともに沼倉に進出し、昭和50年ごろより始まり、５年程で止める。
・当初は、船生に数社が共に進出した、グループのリーダー。
・小森正治は、日光石材株式会社の日光石生産の専務取締役を、昭和40年より昭和54年まで務めた。
・昭和27年大谷石材協同組合の中に機械研究会が設けられ、昭和30年試作機が完成、この電動裁断機を小森正治が昭和32年に改良し、さらに改良を重ねて普及していく。

写真11．小森石材店採石跡
屋号石山の北側

## 10．船生石の歴史を紐解く

### ㈠　塩谷町生涯学習課より、船生通史（VOl. 3）の記載の資料の提供があった。

石産地について、P1157L11より

図１．川村地区と馬洗山（現在字名である）付近及び沼倉採石場　【資料：塩谷町教育委員会生涯学習課】

「三　川村のおこり　川村坪の青年たち」には、次の記載がある。漆原貞三著の『ふるさと川村のあゆみ』の引用をしている。なお、川村とは、塩谷町生涯学習課によると、佐貫の観音さま北付近の集落で現在字名となっている。

「馬洗の原石が底を尽き、これらの熟練した石工職人が次第に仕事場を羽谷久保（はねやくぼ）や富沢山又は沼倉山などに、船生石材の産出に出掛けたり、又宇都宮の大谷石採掘所へも出稼ぎをはじめた。」この記載は、写真からして大正６年５月27日と読み取れるとしている。併せて、よって大正初期のころの状況と考える。

「大正時代に入ってから、川村の２代目に当たる青年達が、この未開発の地域の振興に努力した。農業は勿論、副業なども多種多岐に亘っている。中でも副業として鬼怒川の玉石や、馬洗山の岩石を使って建築用材を産出し、川村人口の８割が石職人として、村内はもとより他村まで進出した。斉藤由蔵や・田中吉松などは年期奉公人を雇って弟子を育成した。

脚注：（徳次郎西根にも一部、徒弟制の家があったことと似ている）

### ㈡　船生　地元の採石者を考える

地場の採石者により古くからおこなわれていた様で、江戸時代の農閑渡世とも考えられるが、そのことは今後の課題としておく。

・大正の初期には川村坪の多くの青年たち、人口の８割がかかわっていた事実からして、この地区のほぼ住民の全ての戸が、船生石の事業に携わっていたと想像される。船生の他の地域にも同様な石工形態があったと考えられ、今後の調査である。
・併せて、同地区は同じく大正時代に18か所程度の、鉱山が、寛文９年（1669）当たりからの採掘がおこなわれていて鉱業の発展していた時代でもある。この鉱業との影響が考えられる。
・以上の記載から、川村地域の石産業の形成には、少なくても明治の時代には採石は行われていたと考えられる。これが、江戸時代、日光北道路の街道文化による、採石文化の流入の可能性が考えられる。
・隣接の矢板市の「平野石」は、江戸末期か明治初期には既に採石されていた事実がある（矢板市教育委員会生涯学習課照会・回答2020年９月20日）。船生石においても、これと同様な時期が開始時期であると考えられ、この辺に文化的つながりが考えられる。
・いずれにせよ、集落の民による採石始まりは、どの採石場においても明らかでないことが多い。今後の検討課題で、地域間の野州全体の相関性が課題である。

## 11．塩谷の船生石の作品

建材としては蔵など、塩谷はもとより宇都宮界隈迄にも散見できる。
花博に出品された、他パナパナちゃん、大阪万博（EXPO'70）等ある。

写真12．パナパナちゃん

### ㈠ 蔵　船生　羽久保　集落

写真13．船生石蔵（羽谷久保）

写真14．船生石蔵（羽谷久保）

### ㈡ 塩谷町役場と船生石・大谷石

現塩谷町庁舎は、令和５年約１㎞東の地点に、立て替えの計画である。旧庁舎も味わい深い石造物がある。

写真16．塩谷庁舎　書庫（大谷石）

写真15．船生石の塩谷庁舎の正門

写真17．塩谷町庁舎境界塀（大谷石）

写真18．船生石は地域では土台の使用が見られる
船生　沼倉　斎藤庄司　宅

写真19．徳次郎西根集落、船生石蔵
（池田平宅）

## 12．最後の徳次郎石仕上げ石工　田崎芳男と船生石

徳次郎最後の仕上げ石工である田崎芳男は、船生石で優れた作品を世に出している。無名の石造彫刻家として、石の特性をいかした作品を紹介しておきたい。

田崎は、もとは宇都宮の国本で、兄弟で採石していたが、あらたな素材と作品を求めて、上徳次郎で石材業を開業、特に細工材や石造彫刻を得意とした。木彫は習ったというが、石彫は独学であったという。其の頃は存在した伝統的な徳次郎石工と友好を深めながら、腕を磨いでいく。筆者とも旧知の間柄である。

宇都宮市金井地区の『十一面観音像』は、平成６年頃に建立、高野山の高僧により開眼式を行った。田崎の妻淳によると、この製作中は一か月、食事がのどを通らず、神がかったように制作に打ち込んでいたという。観音菩薩のモデルは、妻　淳であり、このスケッチは、筆者も見ている。この原石は船生沼倉であり、大関巌と美智

子のコンビで、同時期、沼倉の地下約20mから掘り起こした、手掘りの特注である。すぐさま徳次郎上町の田崎の工房に届けられた。

そのほか、主な作品としては、宇都宮市富屋地区市民センターの「富屋平和像」、宝篋印塔・金太郎（群馬県子どもの森）等がある。

写真20. 田崎　芳男　作
十一面観音像

写真21. 田崎　芳男　作　天女の舞（十一面観音像の扉）

写真22. 田崎芳男　作
富屋平和像（富屋地区市民センター　智賀都神社の倒壊した棟木を使用（徳次郎石系の石である）

## 13. 結　論

昭和38年から始まる、徳次郎石を扱う日光石材株式会社は、大谷石材協同組合の主要なメンバーによって構成された。(本誌、筆者の「徳次郎石の研究　日光石として　日光石材株式会社とその時代」を参照のこと）その影響は、各石材業者に県内外にまでの進出をもたらした。本論、船生石もその一つである。大谷石にない、美しさと機能性を目的にしての展開であったといえる。その戦略は一部成功したかのようであったが、次に訪れる二次にわたるオイルショクにより、自然石そのものの需要は減退の一途をたどるのみであった。かくて、船生進出の各社（正確な数は把握されていない）は、ほどなく撤退した。「船生石」の㈲大幸石材店は、一連の出来事の最後の締めくくりとなった。

大幸石材店が最後まで残った理由は、夫婦石工としての企業努力に他ならない。「鬼怒石」というブランドで、白く美しい光沢ある石材で市場に出たが、かえって美しすぎたのが欠点であったという、地域市場の難しさがある。それでも、船生石は熱狂的な一部ファンに支えられて、使用目的が限定的であったと思われる。

今回、塩谷町当局や地元の協力により、馬洗山を中心にした明治・大正期の地域産業の実像が浮かび上がったが、解明はこれからの課題である。しかし現資料だけでも、近接の自治体の採石地と比し、その規模は相当大きな船生石の地域産業があったことが想定される。富沢山の東部山中の調査に手が及ばず、この最大の採石場の調査から発見の可能性、地域内の船生石の蔵などの石造物の調査を、特に、地元の郷土史家等の参加に期待したい。

本論とは異なる点であるが、今年度は、板橋石（日光市）など野州の各地の採石場跡の調査にも着手した。板橋石は、屏風岩石材店が戦後直後採石を行ったおり、一連の大谷進出より早いもようである。この山中には、蔵などの地場の素材石を使った、梁などの木組みとの見事な古い建物が散在している。地元の所有者の多くは、老朽化で今後の維持は、困難であるという話である。解体・移動等引き受けてくれるなら、無料で差し上げるとのことだ。この譲渡については、全国をターゲットにしたマッチングを行う活動が必要と考える。野州石造文化の継承も危機である。県規模の調査と対応の必要を強調しておきたい。

写真23. 関係者による塩谷町への船生石オブェの引き渡し　令和3年9月7日

## 14. むすびに

当会の研究に欠かせないのが「大谷石材協同組合」である。そのスタッフが大関美智子で、大幸石材店の女将であり、船生石の夫婦石工であり最後は一人となった。

夫婦石工の生活はどんなのものだったか、下世話ながら問うた。沼倉の山中の坑内の話には及ばず、ただ一つ、その生活は夜も寝る暇もなかったと語る。体が丈夫だった、親に感謝しているともいう。

大幸石材店の最後の船生石の作品を、お里帰りとして、塩谷役場に寄贈することを、本会の活動として行うこととした。その作品には、「夢　ミチコとイワオ」と名付けて、関係者による贈呈を行った。これも田崎芳男の作品によるものだ。若き日に石材店を共に営む、夫婦石工のそんな希望の姿を、表してのことだ。他にも多くの石工たちにあったであろう夫婦石工に、敬意を表しての意味も付け加えさせていただく。

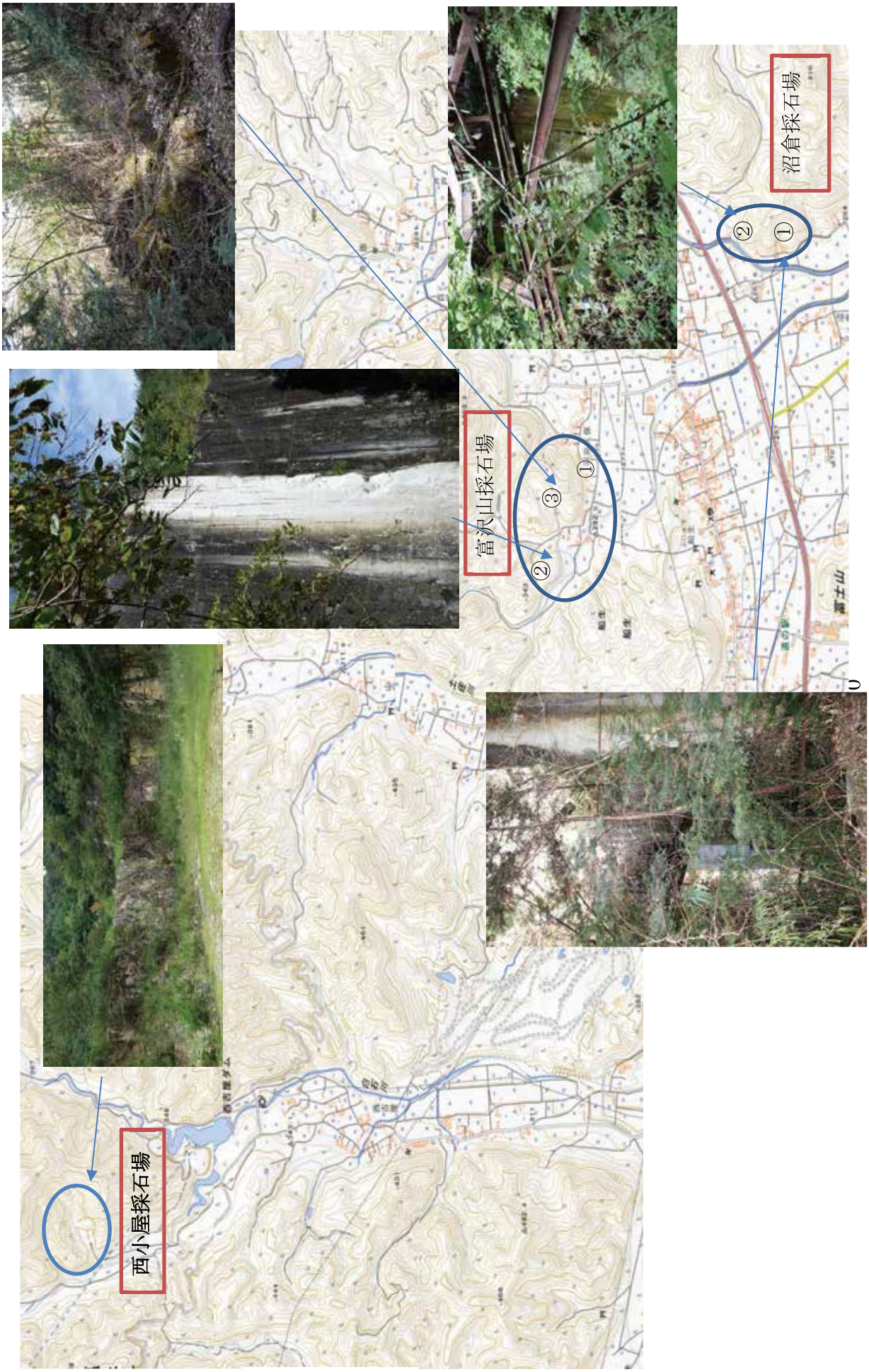
＊本文につき一部敬称は、省略させていただきました。

## 参考文献

第109回企画展　こんなにあるよ！　とちぎの鉱物　～鉱山と鉱石のものがたり～　栃木県立博物館
日光鉱山　野州鉱山p38-39　天頂鉱山p42-43　平成26年７月19日
塩谷町町史　第４巻通史編　　編集　塩谷町史編さん委員会　平成９年３月25日
大谷石百選　ＮＰＯ法人大谷石研究会　栃木の石産地（P112．P113）　水野順敏　2006年７月１日

## 協　力

栃木県塩谷町役場　　総務課　（青木大器）　　教育委員会　生涯学習課　（阿見）

※本稿は、次ページ（Ｐ60）、「地図　船生石（鬼怒石）採石場遺構図」と併せて、ご確認ください。

地図：船生石（鬼怒石）採石場遺構図　（国土地理院電子地形図より作成）